【開催報告】2024 年度国際交流委員会主催オンラインセミナー
「フィンランドと日本における地域での高齢者ケアの実践－コンパッション都市・コミュニティへの形成へ向けて―」

2025 年 2 月 21 日（金）、一般社団法人日本老年看護学会国際交流委員会は「フィンランドと日本における地域での高齢者ケアの実践－コンパッション都市・コミュニティへの形成へ向けて―」と題したオンラインセミナーを開催いたしました。本セミナーでは、日本とフィンランドから 3 名の講師をお招きし、それぞれの国や地域における高齢者ケアの先進的な取り組みや、「コンパッション都市・コミュニティ」の理念と実践についてご講演いただきました。活発な質疑応答も交えられ、世界的に高齢化が進行する現代において、地域で暮らす高齢者とどのようにつながり、支え合っていくのか、多くの示唆を得る貴重な機会となりました。以下に、セミナーの概要を報告します。

各講演の概要

1. コンパッション都市・コミュニティへの招待 ―なぜ、何を、どのように始めるか―

竹之内 裕文 先生 （静岡大学 未来社会デザイン機構・農学部 教授）

竹之内先生からは、まず、アラン・ケレハー氏が提唱した「コンパッション都市・コミュニティ（以下、CC）」の概念と、その世界的な広がりについてご紹介いただきました。CC は、病、老い、死、喪失といった人生における普遍的な経験を地域全体で支え合うコミュニティであり、カナダのオタワやスイスのベルンなどが認定されています。WHO が提唱する「健康都市」よりも速いペースでその取り組みが拡大しており、国際学会などを通じて概念や取り組みが共有されている現状が説明されました。

「なぜ CC なのか」という問いに対し、人間は喪失と死から切り離せない弱い存在であり、その弱さを自他ともに認め、弱さを通じて人とつながることがコンパッションであると解説されました。そして、「CC とは何か」について、単に個人の内面の問題ではなく、人と人との関係性や環境との関わりの中で捉え、一方的なサービスの提供を受けるのではなく「助け合って生きていく」という考え方が根本にあると述べられました。CC は弱さ

を共有し助け合う集団であり、コンパッション都市は複数の CC を内包し、互いの弱さを支え合う政策・制度を持つ都市であると定義されました。さらに、「コンパッションをどう理解するか」という点では、「死」と「喪失」という課題を共に受け止め助け合うことは、人が「死とともに生きる」ことを学ぶ機会であると語られました。そして、「どこから始めるか」については、日常生活の延長線上でできることから始めること、その際に「対話」が重要となることが強調されました。コミュニティの中に専門職を再配置し、困難や課題を抱える当事者を支える仕組みづくりも有効であるとされました。

竹之内先生ご自身が、アラン・ケレハー氏の著書『コンパッション都市』を翻訳され、CC を日本にも広めるべく、静岡県賀茂郡松崎町で「コンパッションタウン松崎」として「困難な課題を分かち合い、お互いに助け合うまち」の醸成に尽力されている実践例も紹介されました。CC 創生のためには、他者と苦しみを分かち合い、助けの手を差し伸べやすい人間関係や社会環境を築くシステムづくりと共に、既に地域に生まれつつある支え合いの萌芽を共に育てていくことが大切であると、具体的な先行事例を交えて説明されました。最後に、「コンパッション」について学べるオンライン講座も紹介されました。

2. コンパッション・コミュニティと看護師の可能性

市橋 正子 先生 （医療法人思葉会 MEIN HAUS 所長、緩和ケア特定認定看護師、在宅ケア特定認定看護師）

市橋先生からは、神戸市で運営されている看護小規模多機能型居宅介護（看多機）「MEIN HAUS」での、コンパッション・コミュニティの理念に基づいた具体的な実践が紹介されました。MEIN HAUS は、医療ニーズの高い高齢者や終末期にある人々、その家族に対し、通い・泊まり・訪問看護・介護を柔軟に組み合わせた 24 時間 365 日の切れ目のないケアを提供されています。看多機は、退院直後の在宅療養生活へのスムーズな移行支援や、家族へのレスパイトケア、がん末期・看取り期・病状不安定期における在宅生活の継続支援など、多様な役割を担い、利用者の状態変化として「家族の介護負担が軽減し在宅療養が継続できた」という効果が最も多く報告されているとのことです。

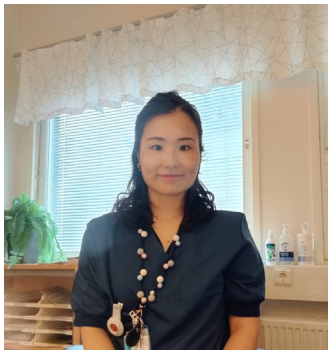
特に MEIN HAUS では、事業所内に「暮らしの保健室」や駄菓子屋「すまいる横丁」、カフェ「MISCH MASCH（ドイツ語で“ごちゃまぜ”の意）」を設け、地域共生社会の実現を目指しています。これらの場は、高齢者だけでなく、子どもたち、地域住民、障がいを持つ人々、そして、人工呼吸器装着した医療的ケア児とその親など、多様な背景を持つ人々が自然に集い、交流し、支え合える「ごちゃまぜの居場所」として機能しています。例えば、カフェでは近所の焙煎所から仕入れたコーヒーを提供し、時には災害看護専門看護師

教育課程の大学院生がバリスタを務めるなど、多世代・多職種が関わっています。駄菓子屋では子どもたちが自分で商品を選んで購入し、利用者が会計をしたり、居合わせた利用者の家族が見学に来た地域住民の介護の相談に乗ることもあるそうです。

このような環境は、利用者や家族の介護負担軽減や QOL 向上に繋がるだけでなく、スタッフが専門職としてのスキルを活かしてボランティアとして社会貢献活動を行う「プロボノ活動」を通じて、人間性や社会性を育む機会にもなっていると述べられました。市橋先生の講演の中では「専門職である前にコミュニティの一員として、地域にとって“ちょっとおせっかいなおばちゃん”が、実は専門性の高い看護師で頼りになる存在」といった看護師像も地域にはあって良いのではないか、というお話がありました。MEIN HAUS の取り組みは、地域住民にとって医療や介護を特別なものではなく、地域社会の自然な一部として捉え、共助の文化を育むことを目指すものと述べられました。

3. 高齢者ケアの新たな形 ―フィンランドの挑戦―

小林 桃子 先生 （フィンランド南ポフヤンマー福祉区セントラルホスピタル 看護師）



小林先生からは、福祉先進国として知られるフィンランドにおける高齢者ケアの現状と新たな取り組みについて、現地で働く看護師の視点からご報告いただきました。フィンランドは日本と同様に高齢化が進行しており、2023 年の医療福祉組織改革を経て、地域住民がどこに住んでいても医療福祉サービスへのアクセスが向上し、質の高いケアを受けられることを目指しています。高齢者ケアにおいては、1990 年代から施設中心ケアから在宅ケアへの移行が進み、2023 年には「施設にかわる居住形態を提供していく」ことが法律に明記されるなど、高齢者が自立した生活を続けることができるよう、多様な居住形態を整えることが重視されています。

具体的な取り組みとして、まず、高齢者の福祉、健康、社会とのつながりを一人ひとりに合わせて推進する専門職「ゲロノミ（Geronomi）」が 2000 年代に誕生し、応用科学大学で養成されていることが紹介されました。また、地域における多様な居住形態として、バリアフリー環境で住民同士の共同アクティビティを通じてコミュニティ形成を促し、必要に応じて個別性を重視したケアが受けられる高齢者のために計画された住まいや、高齢者と介助者が共に暮らす「Perhehoito」などが紹介されました。

さらに、公的サービスを補完する重要な役割として、ボランティア活動の活発さが挙げられました。福祉区と提携するボランティア団体「OLKA」は、患者や家族に時間とサポートを提供し、ボランティア希望者には活動の機会と新たな出会いの場を提供しています。フィンランド福音ルター派教会などの教会団体も、特に社会との繋がりが希薄になり

がちな高齢者向けに無料イベントを開催し、コミュニティへの参加を促しています。

小林先生は、看護師・救命救急士の 2 人が立ち上げた民間訪問看護ステーション「Yhdessä Group（Yhdessä はフィンランド語で“一緒に”の意）」の事例も紹介されました。このステーションは、公的サービスだけでは満たされない高齢者の孤独感や多様なニーズ（訪問看護、家事代行、庭の手入れ、友達サービス、家族介護者支援など）に柔軟に対応し、孤独の予防と真に必要なケアの提供を目指しています。小林先生ご自身も、高齢者と外国人看護学生が交流し、高齢者は学生のフィンランド語習得を助け、学生は高齢者向けアクティビティを提供するという相互的な学びの場を企画されており、看護師が理想と現実のギャップを埋め、高齢者の社会参加の場を創出し、医療と福祉の連携を強化する可能性について述べられました。

まとめ

本セミナーは、日本とフィンランドという異なる文化背景を持つ国々の高齢者ケア実践から、「コンパッション都市・コミュニティ」という共通の理念を見出し、その実現に向けた具体的なヒントを得る大変有意義な機会となりました。高齢化がますます進む現代において、地域全体で高齢者を支え、誰もが安心して暮らし続けられる社会をどのように構築していくか、老年看護に携わる私たち一人ひとりが改めて考えるきっかけとなりました。

国際交流委員会では、今後もこのような国際的な視点を取り入れた企画を通じて、老年看護学の発展に貢献してまいります。

（担当：国際交流委員会）